

フォーク事故 前年比3・6%増

1—9月

厚労省労災発生状況

フォーク事故防ぎ製品の活用も

厚生労働省発表の「労働災害発生状況」によると、昨年1月から9月までのフォークリフトに起因する死傷事故発生件数は、前年同期比3・6%増の1355件だった。

厚生労働省安全衛生部によると、事故の約7割が「はさまれ、巻き

込まれ、激突され」といって接触事故で、こうした状況は長年にわたって続いているという。関係者によると、昨今のEC関連の荷物取り扱量の増加が関係している可能性は否定できないようだ。

労働安全衛生法や労働安全衛生規則では、

「接近感知センサー」は、フォークリフトに作業員が近づいた場合、警報が鳴る装置だ。作業員は腕やヘルメットにICタグを装着し

虫や鳥にも反応するといった誤作動がなく、壁や柱、棚など導線上の死角となる箇所での接触事故を防ぐことができる。

「LEDラインライト」は、リフトの進行方向や旋回範囲の床面にLEDライトの光線が投影されるもの。作業員は、騒音で警報が聞

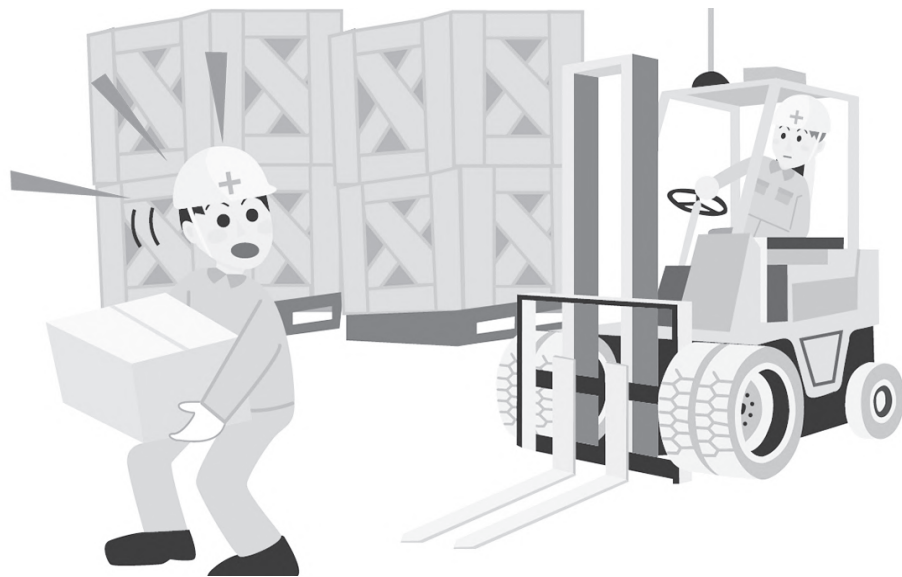
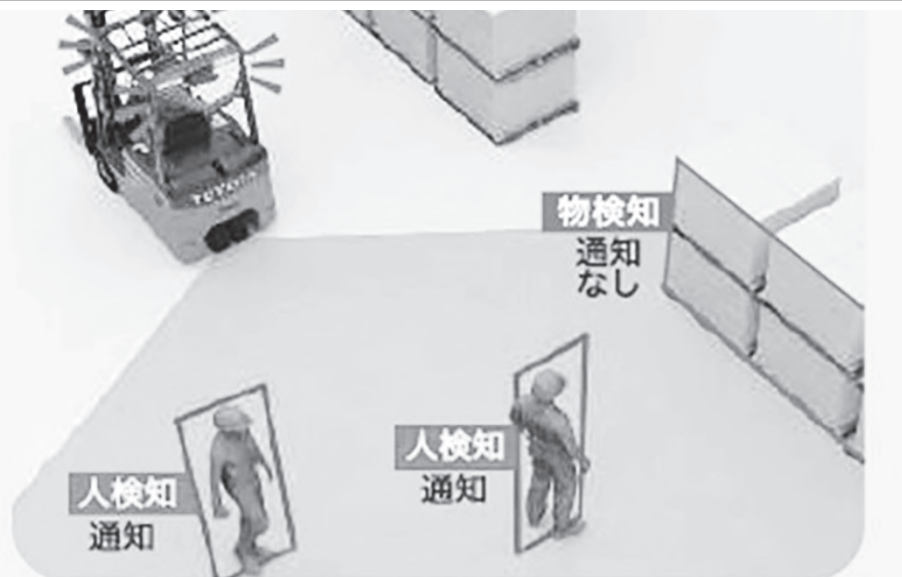
けない。これらの製品は、いずれも、工場、倉庫、運送会社などへの導入実績があり、事故防止に一定の成果を上げており、導入を検討する価値はありそうだ。

フォーク危険運転の AI 採点システム開発

富士通クラウドテクノロジーズは、フォークリフトの危険運転をAI(人工知能)が採点するサービス「安全荷役AIフォークパティ」のトライアル受付を開始した。

安全荷役AIフォークパティは、映像をAIで解析することで荷役に関する危険を検知する他、映像を解析に使うことでセンサーだけでは検知しにくい荷役や周囲の作業員に関する危険操作を検知する。

解析した結果に基づき、危険操作ごとに安全係数を算出しレポートを作成する。



トヨタL&Fの「センスプラス」カメラで人を検知

吉川工業(株)の「作業員接近検知システム」作業員がICタグを携帯

PCS(株)の「LEDラインライト」床面にLEDライトの光線が投影